



『原爆句抄』

松尾あつゆき

松尾あつゆきは明治三十七年（一九〇四）、北松浦郡佐々町の生まれ。荻原井泉水に師事し、俳誌「層雲」の同人となり自由律俳句を学ぶ。長崎市立長崎商業学校の教諭から大浦食糧営団に移りその勤務中に被爆し、妻子四人を失った。

その体験を叙した原爆句が昭和三十年、『句集 長崎』に掲載され、全国的な反響を呼ぶ。昭和四十七年には、句集『原爆句抄』が出版された。

降伏の みことのり

妻をやく火 いまぞ熾りつ

昭和二十年八月十五日の終戦の日に、妻の遺体を火葬した時のことを詠んだ句である。『原爆句抄』に収められたこの句を刻んだ主碑と他の七句を刻んだ副碑が、平成元年十月、「層雲」の同人を中心とする「原爆句碑を建てる会」によって長崎原爆資料館前の爆心地公園に建立された。